

人の心に寄り添う 医療人になる

第24回 人の心に寄り添う「幸福学」・2

慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント
研究科委員長・教授

まえの たかし
前野隆司

昭和医療技術専門学校校長

さんどう まさる
山藤 賢 (インタビュアー)



前野隆司(まえの たかし)氏 プロフィール

1962年、山口県生まれ。1984年東京工業大学工学部機械工学科卒業、1986年東京工業大学理工学研究科機械工学専攻修士課程修了、同年キャノン株式会社入社。1993年博士(工学)学位取得(東京工業大学)。1995年慶應義塾大学理工学部専任講師、同教授を経て2008年よりSDM研究科教授。2011年4月よりシステムデザイン・マネジメント(SDM)研究科委員長。著書に、『脳はなぜ「心」を作ったのか―「私」の謎を解く受動意識仮説』(筑摩書房刊)、『錯覚する脳―「おいしい」も「痛い」も幻想だった』(筑摩書房刊)、『幸せのメカニズム―実践・幸福学入門』(講談社刊)、『人生が変わる! 無意識の整え方―身体も心も運命もなぜかうまく動きだす30の習慣』(ワニ・プラス刊)など。近著に『実践・脳を活かす幸福学 無意識の力を伸ばす8つの講義』(講談社刊)、『実践 ポジティブ心理学―幸せのサイエンス』(PHP研究所刊)などがある。

[前号(1月号)より続く]

仲間の力

山藤：先生のお話や書籍には本当に共感するところが多いです。最近では先生の書かれた本『実践・脳を活かす幸福学 無意識の力を伸ばす8つの講義』(講談社、2017年9月刊)を読ませていただいて、幸せになるために、まず「自分を知る」というところと、そこから入る「世界を知る」という2つのステップにとっても共感しました。ここには、実は自分を知るところでつまづいている人が多いとあります。僕も同感でして、どのような自分であるか、どのような

自分になりたいかを、これまでのこの対談に出させていただいた智慧の賢人たちの言葉や、そこからの気づきによって考えてもらえたらと思って、この連載をやってきました。そして、連載の第1回目に、僕が書いた「医療人としての感性を高める～「感じる」を「信じる」、そして「考える」～ということ」(本誌44巻1号)の中で、臨床検査技師を取り巻く「世界のシステム」という図を掲載しています(62頁)。臨床検査技師のいまの教育は、臨床検査技師としてのスキルを高めていくことに終始しがちであります。しかし、臨床検査技師という枠の外には医療人という大きな枠があり、その外には社会

[本連載の形式] 各界で著名な先生方への山藤先生のインタビュー(対談)にて、組織で働くこと、チーム内でのコミュニケーション、教育、臨床検査技師としての知識・技術の継承と向上、患者さんの心・命、自分の人生の役割などについてお話いただきます。対談のなかで、山藤先生が感じた医療とのつながりの部分を、心の「共振」ポイントとして解説を加えていただきます。



という人間のシステムがあって、その外には世界(宇宙)がある、という価値観で外の世界とつながっていくと、より豊かな臨床検査技師になって戻ってくることができる、ということをお願いたくてこの図を作ったんです。

前野：はい、その通りですね。似ていますね。

山藤：もう1つ似ているなあと思ったのは、先生の著書にもあるフォーカシング・イリュージョン(間違ったところに焦点を当ててしまうという意味)の話です。これはいわゆる思い込みですね。自分はこれがいいと思う。例えば、“臨床検査技師はこうでなければならない！”という思い込みがあるとします。そこにとらわれすぎていると幸せになれないような気がして、先生の著書『幸せのメカニズム』(講談社刊)の122頁にある「図13 幸せと不幸せの因果関係ループ」を見たときに、“僕が言っているのは、ああ、こういうことなんだ”と認識させていただきました。「不幸せの悪循環ループ」やフォーカシング・イリュージョンの「誤った幸せのループ」から抜けられると、「幸せの好循環ループ」に行けて、さらに幸せのメカニズムを世界に広めることができるんですね。そこに気づくことが大事かと思います。

前野：自分を磨くことは、利己的に留まる可能性もある幸せ。一方で、その外側の枠組みが利他的な幸せ。最初は自分を磨かなければ臨床検査技師としてのスキルも身に着かないけれど、そのうち世界とつながってこの矢印のほうに移るほうが幸せ、ということを描かれていますよね、ああ、これも似ていますね。

日本はまさに和の精神で、全体調和を考える民族だったのに、西洋から入ってきた個の精神にフォーカスを当てすぎてしまい、神道の「全てに神が宿る」とか、仏教の「全ては無であり空である」という、日本人が持っていた、素晴

らしい全体感を忘れかけているんですよね。山藤先生の学校も全員で何かをするということを大切にしていますよね。

山藤：はい、確かに企業や組織、さらには学校教育までもが個の精神にフォーカスを当てすぎている気がします。先生におっしゃっていたように、我々の専門学校では、「全員卒業・全員合格」というスローガンのもと、全員で支え合って、全員で臨床検査技師国家試験に受かることを目指しているんです。個人の在り方と組織全体の在り方が一致するのが、本当の喜びなんじゃないかなと思って。

前野：ああ、素晴らしい！

山藤：学生も生き生きと勉強していて、国家試験に受かったときには、皆で何かをする喜びや達成感を感じて全員で泣きながら喜んでいきます。その様子には感動しますね。ただ、他の学校の先生から、「全体主義みたいだ、教育としてはそっちの方向じゃない」と言われることもあるのも事実です。先生、どうでしょうか。

前野：いやいや、それは全体主義ではなくて、全体の調和ですよ。無理やり全体を均一に持っていくのではなくて、全員のことを考えているということですよ。

実は僕の所属している慶應義塾大学も同じなんです。大学に入った者は皆仲間だ、仲間は全員卒業させるんだというのが基本的な考え方です。西洋の大学では、入学者をたくさんとって、ダメならどんどん脱落させていく傾向がありますから、正反対ですね。東洋は集団主義的で、西洋は個人主義的で、日本はいまちょうどその中間にあると思います。だから、集団主義的に全員合格にこだわるという考え方は、まさに今日の全体の論調と同じで、個人主義に行きすぎているのを集団主義のほうに戻そうという流れですね。

山藤：なるほど。でも、そんなことを言っているのは、うちの学校ぐらいでして…(笑)

前野：いやあ、さすが天才(笑)。先見の明ですね。

山藤：いやいや(笑)。臨床検査技師の学校は専門学校が多かったのですが、近年大学が増えてきたんですよ。大学になったら突然、個人主義と自己責任という話が始まって、成績の悪い生徒を進級や卒業させないところが多く出てきたんですね。僕は大学化が悪いと言っているわけではありません。そのシステムも間違っているとは思いますが、ただ、その進級や卒業案件に、教員が個々に丁寧にかかわらなくなってきているのは危惧しているところです。できる人はできる、できない人はできないという点数の評価だけです。そこに教員が丁寧にかかわり寄り添うことで、可能性をより見出すことが教育であり、教育者の役割ではと思っています。社会も同じで、個を値踏みするだけの傾向がある中で、面倒くさい部分に携わりながら、その場の仲間全員で高めていくことを考えていく方向が望ましいのではないかと。そのほうが、結果も伴いますよ。うちの学校は全員卒業・全員合格をテーマにしていますが、それに結果もついてきて、4年連続で、最終学年で留年生を出さず、国家試験合格率が100%でした。

前野：すごいですね。

山藤：決して自慢げに言っているわけではなく、もちろん、受かるときも落ちるときも現実だからありますよ。厳しいこともたくさんあります。でも、全員で挨拶もし、全員で地域の掃除もし、全員でイベントをし、そして全員で互いに教え合いながらの勉強などもしていますが、学生たちは結構楽しそうに、生き生きと幸せそうにしていますよ。

前野：教育も経営も同じですね。ブラック企

業は、無理やり働かせて、それについて来られない者は脱落するままにして、とにかく儲ける。ホワイト企業は、全員で幸せになることを目標に、トップは権限を部下に委譲し、社員は皆信頼関係があって話し合うので、誰も脱落させないですよ。どちらが幸せかといえば、もちろんホワイト企業のほうです。ブラック企業とホワイト企業のどちらも儲かりますが、ブラック企業は短期的です。不景気になったらブラック企業はガシャッと倒れますが、ホワイト企業は皆が継続して働けるように給料を下げて、皆で力を合わせて頑張り、会社は残りますから。山藤先生も、先代から引き継がれてそのような苦勞を体験されていますよね。

山藤：はい、読者の参考になればと恐縮ながら自分の話をしますが、僕は、医療の現場で働きながら、経営的にうまくいかなかったうちの法人を10年前に引き継いだんですが、全員の給与をカットして再スタートしたんです。ブラック企業！(笑) でも、いまはそのときの仲間たちとともに歩む中で、そのときの給料の2倍、支払えるまでになったんです。

前野：まさにホワイト企業！僕はホワイト企業大賞という、社会的に価値のある、職員たちがのびのび仕事をしている会社を評価し表彰する会の選考委員もしているんですよ。ぜひ申し込んでくださいよ！

山藤：いやあ、うちの学校や法人では、うちはブラック企業だといつも職員と皆で笑いながら言っているんですよ(笑)

前野：いやいや、ブラックっぽいホワイトと、ホワイトっぽいブラックがありますよ。

山藤：ああ、確かにそうですね(笑)。本校の教員も、学生の早朝勉強に付き合い、夜残って勉強している学生に付き合い、大変なんです。そのことで変わっていく学生に寄り添って



いる喜びを感じているように思います。職場でも朝からグラグラ皆で笑いながら、元気にやっていますよ。実際、よくやってくれていて、頭が下がる思いです。

前野：そこです。嫌々長時間働いていると病気になると思いますが、本当に皆と信じ合っていたら、長時間労働していても健康で元気でいられると思います。実際に僕がそうですから、僕は確かにすごく忙しいですが、幸せですよ。山藤先生もそうじゃないですか。まあ、だからといって、いまのご時世ではもちろん、長時間労働してもいい、なんては言いませんが。

山藤：僕も全く同感です。忙しいですが、とても幸せですよ。職員を見ていると同様に感じます。先生の著書『幸せのメカニズム』（講談社刊）の中でも、実は自由な時間の少ない人ほど幸福な傾向があると、内閣府の統計でも裏付けられたと書かれていましたね。忙しそうに仕事をしている人が、大変で不幸そうだと思っている人は、それこそ思い込みなんですね。

誰もやっていない分野の第一人者たれ

山藤：先生は、幸せになるには、オンリーワンであるとか、自分の強みを持つ、ヲタクでいいんだなど、何かの道に特化するとその可能性が開かれるというような話を書籍の中でもしていますよね。少し、僕個人の話を例にしてもいいですか？

前野：はい、もちろんです。

山藤：今年(2017年)リクルートさんが、全国の高校生向けに、未来辞典という、将来なりたい職業人50人のインタビューと紹介を載せた冊子を配布したんです。レーシングドライバーの佐藤琢磨さんなどをはじめ、多くのさまざまな分野の著名な方が掲載されている中で、僕は頼まれて、スポーツドクターとして掲載さ

れたんです。写真は、オリンピックに出たときのものなんですけど。

前野：格好いいですね！

山藤：いえいえ、自慢げですみません(笑)。でも、ポイントはそこではなく“高校生が選ぶ50人のうちの1人が僕なの？”と思ったときに、先生が、自分しか幸福学を研究していなかったから、第一人者だと言われるんだ、という話をされていたのを思い出したんです。僕は第一人者ということでは全くないんですが、このスポーツドクターという領域においてはなんとなく認められたんだと。そう考えると、幸福感が増しますね。実は、そこには挫折があるからこの話をしています。僕はサッカーは途中であきらめたんです。全国大会レベルまでは行きましたが、頂点までは無理だとあきらめ、スポーツはドクターとしてかかわってきたわけです。でも、それはある意味ずっと抱えている劣等感なんです。自分は夢をあきらめて、成功できなかったどこかダメな人間なんだと。ところが見方を変えて、サッカーの価値をプレイヤーとしての価値ではなく、ドクターとして参画している価値に変えると、“あっ俺、なかなかやるじゃん。実は幸せな人なんだなあ”と(笑)

前野：わっはっは(笑)。それは重要ですね。実は皆、意外といろんな分野の第一人者なんですよ。これなら自分は一番！ということを意識すると、皆幸せになれるんです。

山藤：ついでに、今年(2017年)、うれしいことがありまして、「渋滞学」がご専門の東京大学の西成活裕先生が、日経新聞の夕刊のコラム(2017年5月24日)で僕のことを、“惜しげもなく人と人をつなぐ稀有な存在、「ハブの人」と取り上げてくださったんです。僕の周りにはその道の第一人者や天才の先生方がたくさんいらっしゃるって、いつも僕はうらやましく

思っていました。自分には飛び抜けた才能や業績はないからです。正直に言えば、それもある種の劣等感です。でもそのような達人たちの間にいて楽しく人と人をつないでいたら、西成先生がそれを評価してくださいました。

前野：なるほど、山藤先生、確かにハズの第一人者ですね！

山藤：でも僕は Twitter や Facebook など SNS はしないので、目の前で会った人としかつながらないのですが、なのにそう言ってもらえて幸せでした。ねらってやった達成感ではありませんが、“楽しいことをやっているんだなあ”と感じました。少々僕の最近の幸せについてしゃべりすぎましたが…(笑)

前野：いや、実例をありがとうございます。わかります。僕も幸福学の第一人者と呼ばれようと思っていたわけではないですから。それまでの研究からちょっとシフトして幸福学を研究していたら、あるとき突然 NHK が評価してくれたんです。

山藤：先生は「世界中の人に、1人残らず幸せになってほしい」と一貫して言っておられますね。そのために幸福学をやっているんだと、これは心に響くなあと思っていたのですが、いまあらためてお話を聞いていて思い出したことがあります。僭越ながら、僕は2013年に『社会人になるということ』(幻冬舎刊)という本を出版しまして、この中で、「私に関わる全ての人に少しでも幸せになってもらうこと」と「何事も一生懸命取り組むこと」という信念を掲げていたんです。少し似ているなあと、先生ほどの大きなスケールではありませんが。

前野：いやあ、奇遇ですねえ、同じですよ。幸福論の幸せの条件でいうと、「幸せになってもらう」というのが第2因子でしょ。「一生懸命取り組む」には、第1因子の「やってみよ

う」、第3因子の「なんとかなる」、第4因子の「あなたらしく」と全部の要素が入っているから、同じですね。

山藤：僕が感覚で話していたことが、統計で裏付けされた幸福論と同じでおもしろいな、と思いました。三由さん、質問いかがですか。

心があるのは幻想、心は折れない

編集室：はい、それでは私からご質問してよいでしょうか。先生は『死ぬのが怖い』とはどういうことか？(講談社刊)という本を書いていらっしゃるんですね。この本のタイトルがとてもユニークで興味を持ちました。この雑誌は医療にかかわるものですので、多くの方にとって死は避けて通れないテーマだと思うのですが、先生が分析された結果、「死ぬのが怖い」とはどういうことだったのでしょうか？

前野：一言でいえば、「自分がある」と思っていることです。その前に、『脳はなぜ「心」を作ったのか—「私」の謎を解く受動意識仮説』(筑摩書房刊)という本を出版していますが、この中で、自分の心は本当はないということを書いているんです。僕たちは自由意思を持っていて、何をしようか決めている気がしますが、脳科学の実験によると、例えば僕たちがお茶を飲もうと決めるよりも0.35秒くらい前に、無意識的な脳の活動がお茶を飲むと決めているんですよ。

つまり、僕たちはロボットのようにプログラムされ、操られたものともいえそうなんです。自分たちの心だと思っているものは幻想で、無意識の決定に追従しているだけです。ということは、死んでいるようなものなんです。「お前はすでに死んでいる」というセリフのある漫画がありましたが、「私はすでに死んでいる」んです(笑)。生とはそういうものなんです。



よ。なのに、心があると思うから死ぬのが怖いんです。もともとない心がたまたまあるかのような、この豊かな幻想に感謝して、心がなくなるのは当然だと思えば、死ぬのは怖くないですね。「生きている、これを失うのが怖い」と思うから死ぬのが怖いので、「いまも本質的には何もない。世界の一部として存在しているかのように感じるだけで、ありがたい」と思っている。死ぬのは怖くない、それを伝えたくて書いた本なんです。だから、僕はこの本を書いているときにとても幸せになったんです。僕はもう死んでいるとわかったのだから、死ぬことを怖がらなくてもいいんですよ。病気になること、上司に怒られることなど、死ぬことに比べたらもう小さいことじゃないですか。そう考えるとものすごく気が楽で、やりたいように生きればいいんだなと思ったんです。

そして、皆が僕のように幸せになるにはどうしたらいいんだろうと考え、幸福学を始めたんです。究極は死んでいるんだから、なんだってなにかなる、じゃあ自分らしくやってみたらどうかと。人の目を気にしてもしようがない、人の目なんて宇宙から見ると全然小さなことだし、宇宙140億年の中にたまたま100年、嘘の自分というものがぼっと現れたんだから、せっかく現れた分を生き生きと生きないともったいないじゃないですか。なくなる、元に戻る日がすぐに来るので、ちょっと寂しいですけど、それまでは自分らしく、自分が生まれたことに感謝してやってみるんです。だから、先に述べた4つの因子の究極は、自分はないという、仏教でいうところの無我、道教でいうところの空の境地、そういうところだと思うんですよね。そこへ行けば幸せですが、幻想の自分が、長続きしない、金・物・地位といった幻想の幸せを目指すから、二重に不幸みたいな状態になってい

るんです。金・物・地位も少しはあったほうがいいですが、140億年というスケールと比べるとどうでもいいような出来事なので、そんなことあまり気にしないほうがいいよね、というところにつながるわけです。

編集室：う～ん、なるほど。

山藤：おもしろいですね。ロボット工学の話がつながって、やはり哲学的な感じの話になりますね。確かに幸福学が、仏教的な拠り所と同じような感じがします。でも先生、あえてうかがいますが、心がないとすると、最初に僕が聞いた「人の心に寄り添う医療人になる」というところに、「心」と出てくる、この心に寄り添うということはどう考えればよいのでしょうか。

前野：おっ、おもしろい気づきですね！僕は、心は幻想だと思っています。本当はないんだと思うことで自己受容が出て、気楽になる、そういうときにはないと言っているんですが、幻想というのは、本当はないのだけど、すごくありありとあるんですよね。本当はないと思えたら寄り添わなくても大丈夫なんですけど、人間は、本当はない心がいろいろ傷むようにできているので、それを本当に心がないようにするためには、1回寄り添ってあげて、「僕がついているから、大丈夫だよ、怖くないよ」と言ってあげるほうが大事な場合もあるということです。心が大事というときと、ないというときと、一見、矛盾しているように聞こえるかもしれませんが…。

山藤：いやあ、すごく腑に落ちます。若者もそうですが、皆すぐ「心が折れたあ」などと言うじゃないですか。実は僕はよく学生に、「心は見えないから折れない。勝手に折れるな。試験の点数という結果で折れてくれ」と言っているんです(笑)。「心という言葉に、簡単に逃げるな」と。こういう場合には、心という幻想に

とられすぎないように、という意味で言っています。

前野：なるほど、いいですね！ 心は折れないですね。僕の言い方で言うと、「心は見えないどころか、ないんだから折れない」ということでしょうか。心がない、と思うと折れないんですよ。あると思うから、“もうダメだあ、ポキッ”と折れるイメージをして折れるんですよ。山藤先生はどうして学生にそういうことを言うようになったんですか。

山藤：はい、うーん、いい話ではないのですが、話してしまいますね。実は過去に、まあ、仕事や家族やさまざまな問題の中で、“僕は生まれてこなきゃよかったんじゃないか”と思うような、自分を全否定されるような、つらい経験をしたことがあるんです。そのときに、先ほどの前野先生の言葉を借りれば、「僕はすでに死んでいる」と思ったんです。存在の全否定ですからね。

前野：おおっ。

山藤：この出来事を経験して、“どうせなら、自分の好きなことをして、仕事とかでも職員の皆に喜んでもらいたい、そして自分がかかわるさまざまな人たちに喜んでもらいたい”と思うようになったんです。いまさら、そこに折れる心が伴わなくなった感覚がありました。

前野：いやあ、やはりつらい体験をした人が心が折れないと、すごく強くなるんですね。

山藤：その体験があっただけじゃないですか？ そうすると、その出来事も幸福に思えます。「幸福学」じゃないですが、感謝ですよ。

前野：その通りです。

山藤：心の話の流れですが、先生は、『脳はなぜ「心」を作ったのか』(筑摩書房刊)の中で、“人の「意識」とは、心の中でコントロー

ルするものではなく、「無意識」がやったことを後で把握するための装置にすぎない”と書いていらっしゃるんですね。対談の冒頭にも出しましたし、先ほどの心の話でも出ましたが、受動意識仮説ですよ。脳科学的には、実は我々が意識するより先に、無意識的な脳の活動がそれを決めていると、これもすごい話です。

前野：無意識の話は、僕の書籍「人生が変わる！ 無意識の整え方」(ワニブックス刊)の中でも対談した、心身統一合氣道会の会長である藤平信一先生(本誌45巻4～6号に山藤先生との対談を掲載)の説かれる^{どう}道の世界とも近いですね。“相手を倒そう”と思うと倒せないけど、“共に動こう”と思うと倒れるとかね。

山藤：そうですね、似ていますね。この前、藤平先生と、呼吸動作という、相手に手首を握らせておいて、その相手を導き動かすという動作をしたときに、「山藤さんは、投げた相手を気遣って、最後に相手を見ますよね。それは優しさですよ」と言われてドキッとしたんです。「そんなところ、見ているんですか」と笑っていたんですが、その後、人の心の動きを察するところのすごく敏感なお話をお聞きし、見えないところにもおもしろい世界観があると感動しました。

人にしかできない仕事

山藤：では僕からも、読者に近いところからの質問を1つ、いいでしょうか。先日、ある病院の臨床検査部の技師長さんから、「“臨床検査の分野は機械化が進んでいますが、人工知能が発達してきたら、機械に臨床検査技師の仕事が取って代わられるようになってしまい、臨床検査技師の仕事がなくなってしまう”、そう私に言ってくる方が本当にたくさんいるんですよ。でも私は、機械化は進むけど、我々にしかでき



ない仕事があるんじゃないか、そちらのほうが大事じゃないかと思うのですが…、山藤先生はどう思います？」と言われたので、「100%、いま技師長先生のおっしゃっていることに肯定です」と言ったんです。そして、前野先生の本の中で僕が共感した、「不幸な人は、機械化・IT化が進んで我々の仕事が人工知能に取って代わられると恐れて言いますが、幸せな人は、本来我々がやらなくてもいい仕事を機械にしてもらって、我々は我々にしかできない仕事をすればいいだけです」と言う人です」と言い添えました。古代のギリシャの対話のようなことに時間を費やせると思えば豊かになるということをお話したら、「まさにそう思います」と、すごく喜んでくれたんです。いまは時代の過渡期で、こういった議論があるかと思いますが、ロボットの研究をされていた前野先生、いかがでしょうか。

前野：最近、そういう議論が多いですが、それは農耕革命直後、産業革命直後と同じですね。産業革命直後はやはり産業の移転が起きて、肉体労働をしていた人は自動車に、織物をしていた人は自動織機に取って代わられたわけですね。だから、マクロにおいて、一部の仕事は取って代わられると思うんですよ。

臨床検査技師の仕事も、まさにおっしゃる通り、技術というところは取って代わられるかもしれないけど、人間と接する感性の部分は残りますよね。医師も同じです。患者さんの病気については、コンピューターがその症状に当てはまるものを瞬時に正確に出してくれるでしょうが、患者さんと接して最後のところをどう判断するかという、コンピューターではできない、個別の複合的な判断は残ると思うんですよ。残るところか、僕、ロボットの心を作っていたからわかるんですけど、いまのロボットではまだ、全然ダメですよ。

山藤：へえっ！ そうなんですか！

前野：将棋に勝つ、囲碁に勝つ、というのは、目的が1つじゃないですか？

山藤&編集室：そうですね。

前野：ロボットは、数学のように、明確にロジックで語れるものは強くなっていきます。「Googleで検索せよ」と言ったら、人間の1億倍の速さで検索できます。でも、ロボットはまだ目的が1つのことしかできないので、何も怖がる必要はないんです。

山藤&編集室：ふ〜ん。

前野：例えばロボットに、弁当を詰めさせようと思ったら、実はなかなか上手にはできないんです。

編集室：へえっ！

前野：おにぎりはちょっと小さいからこっちに詰めて、ウィンナーはおにぎりが潰れないようにここに詰めてというように、複合的に、一個一個、カスタムメイドで気を利かせてやるなんてことは、ロボットはまだ全然できないんです。ベラベラ世間話をしながら手作業でやっているおばちゃんたちのほうが、全然優れているんです(笑)。2045年にシンギュラリティ(注：AIが人間の能力を超える)が起ころうという議論がありますが、まだ人間を追い越すアルゴリズムが見つかっていないので、そういうことは気にしないで、やりがいのある仕事をしていればいいと思います。

どう 道に戻る

山藤：これまで随分とうかがってきましたので、もうそろそろまとめ的なお話に移りたいと思います。先生は教育に携わっていらっしゃいますが、いまから必要な教育に関して何か思うところがありますか？

前野：はい、いつも言っている通りなのです。

が、人が皆幸せになるということを目指した教育をすべきだと思うんですよね。ものづくりでも経営でも、皆忘れているのは、最終目的は人々が幸せになることだということです。教育でも、「何かスキルを身に付けて、世の中に貢献して、皆が幸せな社会ができる」という全体感をちゃんと教育していないから、医学の知識はあるとか、機械工学の知識はあるとか、部分としての知識は身に付けられても、俯瞰的な視点からの大きな教育ができていないところが多いのだと思います。

山藤：その通りですね。

前野：うちの大学の僕が研究科委員長を務めるシステムデザイン・マネジメント研究科では、そういう全体感を持った教育をしようとしています。しかし、本当はやはり、小学校から大学、あるいは専門学校などあらゆるところで、道徳教育というか幸福学教育というか、全体として我々がどう生きるべきかということをきちんと学問化して教育すべきだと思っており、いまそのために努力しているところです。

山藤：ああ、まさにそれは道ですね。僕は臨床検査技師の教育に携わっていて、臨床検査技師が目指す道として、道^{どう}というようなものが大事になっていくと思っていて、先日臨床検査技師道を学ぶ勉強会まで立ち上げてしまったんですが、先生は目指しているものに道^{どう}を感じていますか？

前野：道^{どう}に戻れですね。今日最初から話してきたように、日本には何千年も文化があって、武士道、茶道、花道、仏教など、道^{どう}をやってきたわけですよ。道^{どう}というのは、単にスキルがアップするだけではなく、人格も含めて総合的に成長していく、よくなっていくということじゃないですか。武道などでも、70歳ぐらいが一番強いというじゃないですか。

山藤：心身統一合気道でもそうですね。藤平信一先生がそう言っていました。

前野：20代で力だけは負けないというのはなく、人格も含めて、総合力で高めていくというのが道^{どう}ですね。西洋型の教育は部分を教えることになりがちですが、本来日本にあった東洋型の教育は道^{どう}だったんですよ。これからの教育の目指すものは、それを復興していくということになるかもしれないですよ。

山藤：ありがとうございます。

前野：僕もこれからは教育道^{どう}でいきます。

山藤：山田博さんも、対談で、「森道^{もり どう}」と言っていました(本誌45巻12号)。

前野：あっ、ひろしさん！ あの人はずいいですよね。あの笑顔が最高ですよね。僕は大好きで、見本にしています。この部屋の写真は森のリトリートの山中湖での写真ですよ(写真)。

山藤：いい写真ですね！ 僕もひろしさんのあの笑顔は大好きです。でも前野先生の笑顔も同じで大好きですよ。幸せ感が滲み出ていますから！ 道^{どう}には、幸福道^{どう}もありますね。あっ、道^{どう}だらけですね！ そういえば僕はこの前、学生や職員に「人はよりよくなりたい生き物」というような話をしていて、当然なんですが「より悪くなりたい人」と言ったら誰も手を挙げないんですよ。じゃあ、皆やはり「よりよくなりたい」んだよねと、「何もしないで家で寝ていても幸せだと思うかもしれないけど、それではよりよくならないよ。よりよくなるためには、何か冒険が必要じゃないか」と言ったんですが、そのとき、僕らはよりよくなりたい生き物なので、だからこそ変わらなければならないんだという道をちゃんと示せたらいいなと感じました。

前野：それを幸福学の言い方で説明すると、成長する人のほうが幸せだという研究結果があるんですよ。だから、「なぜよりよくならなけ



ればいけないか」と言われれば、「よりよい社会を作りたいから」とマクロにも答えられますし、もうちょっと個人に向けた言い方をすると、「よりよくなったほうが幸せになるから」なんです。統計学的に、家でゴロゴロ寝ているよりも、よりよくなったほうが、しかも利他的なほうが幸せだということはわかっているのです、よりよい世界を作ろうと思ひましょう、ということですね。

山藤：先生がそれを統計的に、因子的に分析されて話されているのは本当に素敵ですね。

前野：だから、実践者の人と共感するんですよね。これをもっと広げていくよう、お役に立ちたいです。

山藤：いまもお話があったのですが、あえておうかがいします。この雑誌の読者のために、臨床検査技師にとって幸せになる、豊かになるとはどういうことなのかについて、先生、何かアドバイスがありますか？

前野：人々を救うための、素晴らしい仕事じゃないですか。でもたぶん、どの仕事もそうなんです。つい部分を見てしまうと思うんです。臨床検査技師さんでいえば、検査、という部分の大変さです。レンガ職人の例え話と同じで、「大変なレンガ積みという仕事なんですよ」と言う人と、「大聖堂を作って人々の幸せのために仕事をしているんですよ」と言う人では違うじゃないですか。だから振り返ってください。本当に素晴らしい仕事をしているので、それにものすごい誇りを持って、「幸せだなあ」と思って仕事をしてほしいというのが、心から思うことですね。

山藤：ありがとうございます。それでは最後に1つだけ、「先生にとっての人の心に寄り添うというのは、どういうことですか？」という質問をいつも皆さんにしているんですが、あら

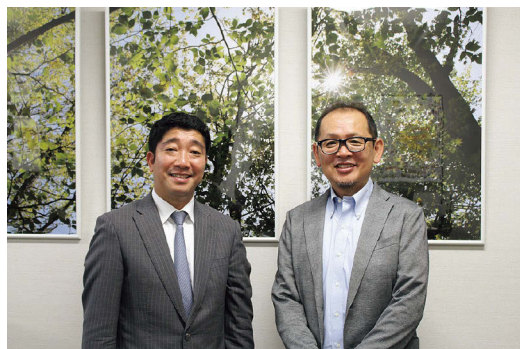


写真 前野先生の研究室にて—森のリトリート、山中湖での写真を背景に

(左：山藤先生、右：前野先生)

ためてお願いしてもいいですか？

前野：対談の最初に戻りましたねえ。そうですね、人の心に寄り添うためには、やはり自分が幸せであって、皆の幸せを願うことですね。そして、『無意識の力を伸ばす8つの講義』（講談社刊）にも書いた、自分を愛し、皆を愛することだと思います。自分はできると思うから余裕もあって、「人の心に寄り添おう」という気持ちになるじゃないですか。だから一言で言うと、自分を愛して世界中を愛する人が幸せな人なので、僕にとってはそれと同義語だと思います。

山藤：はあ、素敵です、先生！ 前野先生の大好きな山田博さんとの対談(本誌45巻10～12号掲載)でも僕たちはまとめとして大きな愛という話をしていて、先生のお話まさに、最後大きな愛の話かあと思って感動しました(笑)

前野：同じですか！ うれしいですね(笑)。今日は色々お話できて満足でした。

山藤：本当ですか。そう言っただけだとうれしいです。大変ご多忙の中、本当にありがとうございました。

編集室：今日はありがとうございました。(了)
(次頁：共振のポイント)



今回の対談を終えて、
私を感じた最初のことは、「幸福」について対話をしている時間がとても

「幸福だった」ということです。楽しく、豊かな時間でした。同様に読者の方も、この対談を読まれている間、幸福な時間だったのではないのでしょうか。それは、前野先生が最後の質問で答えられたように、“自分が幸せな人だから”ではないのでしょうか。だから、私も読者の皆さんも幸せな気持ちになれるんです。自分が幸せであって、皆の幸せを願うこと、自分を愛し、皆を愛すること、その「実践者」が前野先生であるということ強く感じた対話の時間でした。

私たちには皆、幸せになる権利があります。そのための、幸せとは何かということ、まずは皆に伝えている前野先生は、まさに崇高な仕事をされています。でもその笑顔はいつもあたたかく、その行動は、全て実践的で活動的です。

前半の共振でも述べましたが、私たちにとって、何もしないこと、何も起こらないことが幸せではありません。この対談の意義は、少しでも読者の方々に気づきを与えられるにあると思っています。そして、何かに気づいたら、それを感じて、信じて、行動することです。そ

れが、自分が幸せになることに結びつきます。そして、皆さんが少しでもそうなれたら…、私も幸せです。そして、皆さん個人個人のその幸せがまた、周りの皆を幸せにすることにつながります。ありのままの自分で、ありのままの世界観であることが幸せな世の中で、それを目指して前野先生は活動をしているのでしょう。

皆さんが幸せになることを願って、さまざまなことにチャレンジすることを願って続けてきたこの対談ですが、2年を経過し、いよいよ旅の終焉を迎えようとしています。次回の対談者には、世界一のチームをキャプテンとして率い、世界一のバロンドールを受賞した、女子サッカープレイヤーで、かつ私の大親友でもあります、元なでしこジャパン、澤穂希さんをお招きし、その数々の経験、生き様やリーダーシップについて、本音をうかがいたいと思っています。その後は、私のほうで、総括の振り返りをして、長く続いたこの連載も終了の予定です。寂しさもありますが、もう少しの全力投球、頑張らせていただきます。楽しみです。いつもご愛読、ありがとうございます。
(山藤)

本連載に関するご質問・感想などは、編集室
(e-mail: kensa@igaku-shoin.co.jp)までお寄せください。



山藤 賢(さんどう まさる)氏 プロフィール

1972年東京都生まれ。昭和大学医学部、同大学院医学研究科外科系整形外科学修了。医学博士。小学校から高校までは私立暁星学園サッカー部で活躍。東京都大会で優勝した他、全国大会にも出場した。現在は臨床検査技師教育に特化している昭和医療技術専門学校の校長として学生の育成にかかわる傍ら、現役の臨床医として患者とも向き合う。医療法人社団昭和育英会理事長、横浜つづきメディカルグループ代表として医療機関を複数経営。日本臨床検査学教育協議会においては、副理事長を務め、2014年には学会長の任も務めた。また、なでしこジャパンのチームドクター(オリンピック、ワールドカップなど帯同)、東京都サッカー協会医事委員長(現)を務めるなど、スポーツドクターとしても活躍している。また、2013年の著書「社会人になるということ」(幻冬舎刊)は、丸善日本橋本店にて、週間ランキング1位(ビジネス部門)になるなど、その活躍は、医療界にとどまらず、広いフィールドで注目されている。